語りの談話における視点と事態把握

奥川　育子

キーワード：視点、注視点、視座、主観的事態把握、客観的事態把握

1. はじめに

本稿では、日本語母語話者と学習者のアニメーションのストーリーを書いた談話をもとに、主人公とストーリー上重要なやり取りをする新登場(人)[1]物導入場面に焦点をあて、その場面における視点の移動の考察を行った。

先行研究では、視点を「カメラ・アングルの違い、即ち、話し手がどこにカメラを置いて、出来事を描写しているか(久野 1978:129)」、「ある出来事を、その当事者として、内部から主観的に眺める人の位置(大江 1975:9-11)」と定義している。また、池上(1983)は、「大きな段切れがない限り、視点の一貫性がテクストの構成要素として要求される」と指摘しており、主語を固定し、一貫した視点を保つことが日本語の特徴であると述べている。

しかし、視点という概念だけでは談話を分析する上で曖昧であったり、非文でない文まで非文に判定されてしまったりすることがある(松木 1992)。よって、本稿では、視点を注視点(どこを見るか)と視座(どこから見るか)に下位分類し、新登場(人)物導入場面において談話展開分析を行った。

その結果、日本語母語話者は新登場(人)物導入の際、新登場(人)物をガでマークし、そこに注視点を移すが、視座は一貫して主人公においていることが分かった。それに対し、学習者は注視点の新登場(人)物への移動も、視座の主人公への固定も行っておらず、学習者の談話は、母語話者にとって不自然で理解しにくいものになっていた。

認知言語学観点から見ると、日本語は「主観的な事態把握(事物に対する捉え方)が相対的に広い範囲で許容される言語(池上 2000)」である。今回の調査でも母語話者は「主人公(ピングー)の中に自らをのめり込ませる」「主観的事態把握」を行っていたが、学習者は「主人公と自らの身を分離し、その姿を外から離れて見る」「客観的事態把握」を行っていた。この事態把握の違いも学習者の談話を不自然なものにしている原因の一つであると考えられる。

2. 視点に関する先行研究と本稿の主張

日本語母語話者と学習者の談話を考察した先行研究では、母語話者は視点を固定する傾向にあると述べている。渡辺(1996)では、母語話者は主人公寄りの視点で述べるのに対し、

[1] 人物だけでなく物の場合もあるので、人を(　)に入れた。

学習者は母語話者に比べ、視点を固定していないことを示している。また、金(2001)では、母語話者は特定の人物を主語に据える傾向があるが、学習者はその時々の動作主を主語にし、視点がばらばらであると述べている。さらに、田代(1995)は、母語話者は主人公の視座から物事を述べるのに対し、学習者はそうではないため母語話者にとって分かりにくい談話となっていると指摘している。これらの研究によって、母語話者は視点を固定する傾向にあるということが明らかになったが、本研究では、これらの研究結果を踏まえ、さらに視点の移動を精密に分析するため、視点を注視点と視座に分けて分析する。また、視点の移動があらわれやすいと考えられる新登場人物導入場面に焦点をあて、母語話者と学習者の談話展開を考察する。

その結果、これまでの研究では明らかにされなかった、以下の点が明らかになった。母語話者は新登場(人)物を談話に導入する際、そこに一時的に注視点を移動させるが、視座は主人公に固定したままであり、これらの特徴は日本語の主観的事態把握の表れであると考えられる。

3. 調査概要

3.1 調査方法

調査資料は、渡辺(2003)を参考に、オットマー・グッドマン制作によるピングー・シリーズの「ピングーの一人旅」(約5分)を使用した。この資料を選択した理由は、まず登場人物が言語を使ってコミュニケーションをしていないので、調査協力者が何語の母語話者であっても有利や不利にならないからである。また、登場人物がペンギンなので、特定の文化や人種を想起することなく、同じ条件でストーリーを見ることができる。さらに、前提知識がなくてもストーリーを理解できるからである。先行研究には4コマ漫画等を使用した研究が数多く見られる(金 2001、増田 2001、渡邊 1996 等)。しかし、アニメーションは4コマ漫画と違い 1 コマずつに話が途切れておらず、ストーリー展開がスムーズで、はっきりしていることから、アニメーションを選択した。

このビデオを調査協力者に2回見せ[2]、その後「ストーリー内容を知らない読み手にストーリーを伝えるつもり」で作文するよう指示し[3]、それをデータとして分析した。

3.2 調査協力者

調査協力者は、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者である。学習者のレベルわけには SPOT(Simple Performance-Oriented Test)[4]を使用した。その結果、今回の調査対象となったのは、日本語母語話者 20 名(年齢 20 代、日本の大学・大学院生)、中級学習者 20 名(中国語母語話者、年齢 20 代、日本の大学・大学院生)、上級学習者 20 名(中国語

---

[2] メモの使用を許可。

[3] 日本語学習者は辞書使用可。600 字程度。作文所要時間は約 40 分。

[4] SPOT ver2 (65 点満点)を使用。点数の高いものから、上・中・下位に分け、レベル差を見るために上位と下位を比較した。上位は 52 点以上、下位は 43 点以下である。

母語話者、年齢20~30代、日本の大学・大学院生)である。

3.3 分析場面

「ピングーの一人旅」は、「主人公のピングーがおじいさんの家まで一人で旅をする」という話であり、大きく以下の3つの場面に分けられる[5]。

場面1：ピングーが朝起きてから、旅に出るまでの家の中での出来事。

場面2：ピングーが旅に出てからおじいさんの家に着くまでの出来事。

道中、a)絵描き、b)赤ちゃんとそのお母さんに会い、c)その後ピングーの脇を車が通り過ぎ、荷物を落とす。それをピングーが運転手(郵便やさん)に知らせて、お礼に車に乗せてもらう。

場面3：おじいさんの家に到着し、そこで寝るまでの出来事。

今回は日本語母語話者と学習者の作文で、視点(注視点と視座)のダイナミックな移動が見られると予想される、新登場(人)物(車、荷物、運転手等)の導入・展開場面に焦点をあてる。そのため、場面2の「車がピングーの横を通り過ぎて荷物を落とす→ピングーがそれを運転手(郵便やさん)に知らせる→お礼として車に乗せてもらう」という場面を取り上げて分析することにする。

4. 注視点と視座

本稿では、視点を注視点と視座に分ける。理由は、視点という概念だけではうまく説明がつかない現象[6]が存在する(松木 1992)ことと、談話の中での視点の移動をより精密に考察するためである。

母語話者の作文例から注視点と視座を示すと以下のようになる。

(例1)・・・運転手さんは、お礼にピングーを車に乗せ**てくれ**ました。

注視点は、意識が向けられている対象である。この文は運転手について語られており、運転手に意識が向けられているため、注視点は「運転手さん」である。意識の対象、つまり動きや出来事の中心となっているものが注視点であり、注視点は動作主に置かれることが多い。

一方、**視座**は、「(て)やる(あげる)」「(て)くれる」などの授受(補助)動詞や、「行く」「来る」

---

[5] 場面分け(1、2、3)は筆者が行った。ただ、母語話者の作文でも1、2、3の場面の開始部分で段落が新しくなっていることから、母語話者はここで場面が切り替わっていると認識していると推測される。

[6] 「鎌倉は横浜から近い」という文は、話し手が横浜から鎌倉を眺めて「近い」と表現しているため、視点は横浜にある。しかし、久野(1978)の談話法規則<話し手は主題化されているもの(ここでは鎌倉)寄りの視点をとる>に矛盾しているため、非文となってしまう。これは、従来の「視点」に視座と注視点の両方が混在していることが原因である(松木 1992)。

「通り過ぎる」などの移動動詞によって判断する。「(て)やる(あげる)」は恩恵の与え手に、「(て)くれる」は恩恵の受け手に視座がある。上述の例では、視座は「**～てくれ**」という表現があるので、恩恵の受け手ピングーである。また、「行く」「来る」「通り過ぎる」によっても、視座から次第に何かが遠ざかったり、視座に接近したりすることが判定できることから、これらも視座の判定基準になる。

以上の基準をもとに、次節で母語話者と学習者の談話における注視点と視座を考察する。

5. 談話分析結果

5.1 母語話者の書き言葉の談話分析

＜表記の凡例＞

太字：「(て)やる(あげる)、(て)くれる、行く・来る、通り過ぎるなど」視座を判定する手がかり。 網掛け：その文で中心的に語られているもの。注視点。 囲み線：新登場(人)物＋ガ格 下線：新登場(人)物(郵便やさん、車、荷物等)導入文。

母語話者の談話分析を以下で行う。

＜母語話者の作文例＞

(NS8) ①(φ**ピングーが**)赤ちゃんにべろべろばーをしていると、②**赤ちゃんのお母さんが**おやつを**くれ**ました。③(φ**ピングーが**)またしばらく行くと、④クラクションを鳴らしながら**郵便やさんが**やって**き**ました。⑤(φ**郵便やさんは**)ピングーを追い越すときに荷物を一つ落としたので、⑥(φ**ピングーは**)呼び止めて教え**てあげ**ました。⑦行く方向が一緒だったので、**郵便やさんは**配達車にピングーを途中まで乗せていっ**てくれ**ました。

NS8	視座	注視点
①[7]	—[8]	ピングー
②	ピングー	赤ちゃんのお母さん
③	—	ピングー
④	ピングー	郵便やさん
⑤	—	郵便やさん

[7] 基本的には、一文単位で視座と注視点を見ている。しかし一文内で視座または注視点が変わっている場合は、従属節と主節とに分けて判定した。

[8] ここでは、視座を判定する手がかりが表れていないため、「—」とした。

⑥	ピングー	ピングー
⑦	ピングー	郵便やさん

注視点に着目すると、④は「郵便やさん」について語られており、意識が「郵便やさん」に向けられているため、注視点は「郵便やさん」である。また、「郵便やさん」は初めて談話に導入されるとき、ガでマークされ、自動詞の主語の位置[9](「郵便やさんがやってきました」)で導入されていることがわかる。

一方、視座は、②で「**くれる**」という表現が使われているので、恩恵の受け手ピングーにある。また以下の④⑥⑦も、視座を判定する手がかりによって、すべてピングー寄りの視座である。(④「**てくる**：郵便やさんがピングーのほうに近づいてくる(求心の動詞)」：ピングー寄りの視座。⑥「ピングーは～**てあげる**」：恩恵の与え手であるピングーに視座。⑦「**てくれる**」：恩恵の受け手ピングーに視座)

①③⑤では、視座を判定する手がかりがないが、これらはすべて従属節であり、主節の視座はピングーのみである。

このパラグラフ全体を通して見てみると、注視点は、ピングー→赤ちゃんのお母さん→ピングー→郵便やさん→ピングー→郵便やさんと移動している。しかし、視座は一貫してピングーである。

以上のように基準に照らし合わせ、母語話者 20 名全員の談話を分析し、まとめたものが以下である。

母語話者の特徴

新登場(人)物の談話導入場面：

1)新登場(人)物を**ガでマークし、注視点を新登場(人)物に移動**：95%(19/20)

2)しかし、**視座は一貫して主人公(ピングー)のみ**：100%(20/20)

5.2 中級学習者の書き言葉の談話分析

次に、中級学習者が語りの談話において注視点と視座をどのように使用しているのか分析を行う。さらに本節の最後で母語話者の使用状況と比較する。

＜中級学習者の作文例＞

(中 9) ①そのトラックは道を走るとき、**何物か**落ちまして、②**ピングーは**見えました。③(φ**ピングーは**)運転手に教えました。④**運転手が**ピングーに感謝して、ピングーの行きたいところに送りました。

[9] DuBois(1987) Preffered Argument Structure「新情報を担う語彙名詞は S(自動詞の主語)か O(他動詞の目的語)の位置で導入される傾向にある」という主張を支持するものである。

中9	視座	注視点
①	—	何物か
②	—	ピングー
③	—	ピングー
④	—	運転手

①は、「何物か」について語られており、意識が「何物か」に向けられているため、注視点は「何物か」である。

③④に関しては、恩恵を示す授受補助動詞「てくれる/あげる/もらう」が使われていないことから、視座が判定できない。しかし、母語話者の談話に近づけるには、③で「(ピングーは)運転手に教え**てあげました**」のように「てあげる」という表現を使用し、恩恵の受け手ピングーに視座を置いた方が良い。また、④も同様に「(φ運転手はピングーを)送っ**てくれました**」と「てくれる」という表現を使用し、ピングー寄りの視座にした方が、日本語らしい自然な談話となる。

注視点は物→ピングー→運転手と移動しているが、ガで新登場物「何物か」をマークしていない。また、視座を判定する基準となる補助動詞や移動動詞を一度も使用していないことから、母語話者にとって非常に分かりにくい談話となっている。

以下、中級学習者の特徴をまとめる。

中級学習者の特徴

・主要新人物をガでマークし、注視点を新人物に移動：10%(2/20)
・視座の固定：(母語話者 100%に対し)0%(0/20)

中級学習者は、視座を判定する手がかりを使用すべきところで、使用していないものが多く、[10]また使用していても、主人公(ピングー)に視座を固定せず、他の登場人物の視座からも述べている。本節の分析結果により、母語話者の特徴である「注視点の新人物への移動」と「視座の主人公への固定」は、中級学習者において、全くできていないことが明らかになった。以上の結果より、中級学習者の談話は、母語話者にとって分かりにくく、不自然に感じされるものとなっている。

5.3 上級学習者の書き言葉の談話分析

最後に、上級学習者の談話分析を行い、母語話者のものと比較する。

[10] 新登場(人)物の導入・展開パラグラフにおいて、授受表現を使用していた中級学習者は20%(4/20)であった。

＜上級学習者の作文例＞

(上 12) ①(φピングーは)ある程度あるいたら、②(φピングーは)車から物を落としたのを見て、運転手さんに教えて**てあげ**た。③**運転手は**、そのお礼でピングーを別れ道まで送って**あげ**た。

上 12	視座	注視点
①	—	ピングー
②	ピングー	物
③	運転手	運転手

②で新登場物「物」が初めて談話に登場するが、注視点をそこに移動せず、「ピングーは＋新登場物を＋見た」という形で新登場物を談話に導入している。この文はピングーについて語られているので、注視点は新登場物ではなく、ピングーである。

③は、「運転手は～**てあげ**た」という表現が使われていることから、恩恵の与え手である運転手に視座があると判断される。しかし、日本語らしい談話に近づけるためには、「運転手は、ピングーを送って**くれ**た」という表現を用い、視座を恩恵の受け手であるピングーに置いた方が良い。そうすることで、視座がピングーに統一され、日本語らしいスムーズな談話になる。

以上から、上級学習者においても、母語話者の特徴である「注視点の主要新人物への移動」と「視座の固定」ができていないことが明らかになった。上級学習者の特徴をまとめると以下のようになる。

上級学習者の特徴

・新登場(人)物をガでマークし、注視点を新登場(人)物に移動：35%(7/20)
・視座の固定：(母語話者 100%に比べ)わずか 10%(2/20)[1]
⇒注視点を主要新人物へ移動し、かつ視座を固定：0%(0/20)

【表 1】 注視点の移動と視座の固定

	母語話者	中級	上級
(1) 注視点を新登場(人)物に移動(ガでマーク)	(19/20) 95%	(2/20) 10%	(7/20) 35%
(2) 視座を主人公に固定	(20/20) 100%	(0/20) 0%	(2/20) 10%
(1) と(2) を両方とも満たすもの	(19/20) 95%	(0/20) 0%	(0/20) 0%

【表 1】は、母語話者、中・上級学習者の談話において、「注視点の新登場(人)物への移動」と、「視座の主人公への固定」がどのくらいの割合で行われていたのか表したものである。

この表から、母語話者は、高い割合で「注視点の新登場(人)物への移動」かつ「視座の主人公への固定」(95%)を行っているのに対し、学習者は上級・中級共に「注視点の新登場(人)物への移動」と「視座の主人公への固定」を同時に行っていたものはゼロであり、母語話者のような談話展開が全く出来ていない。

次に、視座の習得状況をさらに詳細に考察するため、第一段階「視座を明示できるか」、第二段階「その視座を主人公に固定できるか」に分けて分析を行った。その結果が【表 2】である。

【表 2】　視座の明示と固定

	母語話者	中級	上級
[第一段階]視座を明示できるか	(20/20) 100%	(4/20) 20%	(17/20) 85%
[第二段階]その視座を主人公に固定できるか	(20/20) 100%	(0/20) 0%	(2/20) 10%
[第一、二段階]両方とも満たすもの	(20/20) 100%	(0/20) 0%	(2/20) 10%

まず、母語話者、中・上級学習者が、第一段階として視座を判定する手がかりを使用し、「視座を談話の中で明示できるかどうか」考察した。その後、第二段階として、「明示された視座が、主人公のピングーに固定されているかどうか」分析を行った。

その結果、母語話者は全員視座を明示しており、かつその視座を主人公に固定していた。しかし、中級学習者では、視座を判定する手がかりを使用し、視座を明示していたのはわずか 20%のみで、その視座を主人公に固定していたのは 0%であった。それに対し、上級学習者は 85%が視座を判定する手がかりを使用し、視座を明示していた。しかし、その視座は主人公以外のものであったり、様々な人物に移動していたりして、主人公に視座を固定していたのはわずか 10%であった。

これらの結果から、中級学習者は、まず第一段階の「視座の明示」が出来ていないことがわかる。上級学習者は、視座の明示はできているが、第二段階の「その視座を主人公に固定する」ことができていない。このように学習者の日本語力に応じて、視座の習得にも段階があることがわかる。談話内で一貫して視座を主人公に固定することは、上級学習者にとっても難しいということが明らかになった。

以上【表 1】【表 2】をまとめると、「注視点の新人物への移動」と「視座の主人公への固定」は母語話者の談話展開の特徴であるが、学習者にとって習得が困難なものとなっている。

本節では、母語話者と学習者の書き言葉の語りの談話における、新登場(人)物導入場面での注視点と視座の動向について考察を行った。次節では、これまでの母語話者と学習者の談話展開の結果(注視点と視座の表れ方)が、両者の事態把握の違いを反映したものであることを示す。

6. 主観的/客観的事態把握

今まで考察してきた母語話者と学習者の注視点・視座の表れの違いは、両者がどのように対象を捉え、それをどのように表現しているかの違い(事態把握の違い)に因ると考えられる。ラネカーは、以下のように「言語の意味論に必要なのは、状況の客観的な特徴づけだけでなく、言語主体がいかにその状況を捉え、それを表すかということである」と述べている。

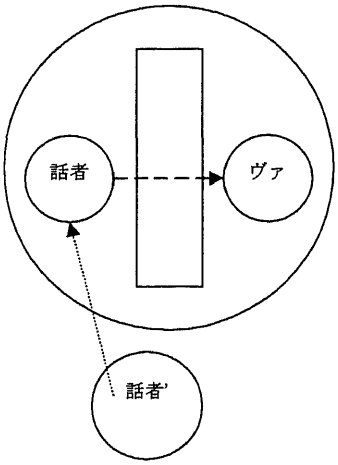
Langacker(1990a:313): "an expression's meaning cannot be reduced to an objective characterization of the situation described: equally important for linguistic semantics is how the conceptualizer chooses to construe the situation and portray it for expressive purposes."

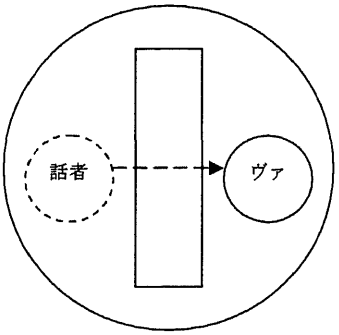
さらに、ラネカーは話者の主観性の度合いの違いを示すために以下のような例文をあげている。

(例 2) a. Vanessa is sitting across the table *from me*.
b. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990a:328)

(2a)では、例えば話者が自分の写った写真を見ながら表現していると考えられ、自分を客観的に捉えている(テーブルの目の前からではなく、違う位置からその状況を眺めている)。しかし、(2b)では、話者は実際にテーブルの目の前に座っていて、その位置からヴァネッサを見ているという解釈が可能になる。よって、(2b)は(2a)より主観性の高い表現となっている。

これらの状況をラネカーの図式(Langacker 1985:143)をアレンジして示すと以下のようになる。





ヴァ：ヴァネッサ

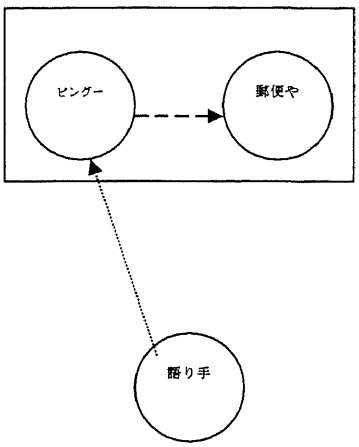
【図 1】(2a)に対する図式　　【図 2】(2b)に対する図式

【図 1】は(2a)を図示したものであるが、ここでは、自分(話者)を客観的に見ているもう一人の自分(話者')がいる(話者自身の姿が含まれ、それを明示的に示すため、(2a)では一人称代名詞 *me* が使用されている)。認識主体である話者は、テーブルから離れ、自分自身を客観的に離れた場面から捉えていることがわかる。一方、(2b)を表す【図 2】には、話者自身の姿は含まれず、(2b)では一人称代名詞 *me* も使用されていない。話者はヴァネッサとテーブルを挟んで座っており、その位置からヴァネッサを見ている(話者は自分自身を客観的に見ることは出来ないため、点線で示されている)。

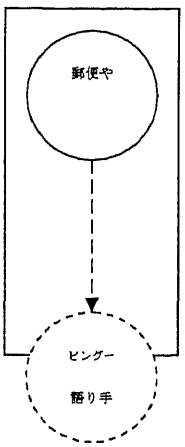
このラネカーの事物に対する捉え方の違いを援用し、今回の母語話者と学習者の談話展開の違いを表してみる。

5 節の結果から、新登場(人)物(車、郵便やさん等)を談話に導入するとき、母語話者と学習者の間で明らかな違いが見られた。学習者は、中級学習者 45%(9/20)、上級学習者 30%(6/20)において「**ピングーは＋新登場(人)物を/に＋見た/会った**」という形で導入していた。それに対し、母語話者は新登場(人)物を談話に導入するとき、「**(しばらく歩いていると)新登場(人)物が(ピングーのほうに)やって来た**」という形で新登場(人)物を導入していた。

以下【図 3】【図 4】は、母語話者と学習者の同じ事態に対する捉え方(事態把握)の違いを表したものである。



【図 3】学習者の事態把握
「ピングーは郵便やさんを見ました」



【図 4】母語話者の事態把握
「郵便やさんが（ピングーの方に）やって来ました」

【図 3】は学習者の事態把握を表したものである。主人公のピングーと新登場人物の郵便やさんは客観化され、「ピングーが郵便やさんを見た」という状況を語り手(ここでは学習者)は外から見ている。よって、学習者は客観的に事態把握をしていることが分かる。これは、先ほどの【図 1】の事態把握に非常に似ている。一方、【図 4】は母語話者の事態把握を示し、語り手(ここでは母語話者)は主人公ピングーと一体化し、「郵便やさんが(ピングー(語り手)の方に)やって来た」という状況を表現している。この時母語話者は、自分自身と主人公のピングーを融合し、ピングーの視座から新登場人物である郵便やさんを捉えているため、自分自身は見えておらず点線で表されている。

以上のように、母語話者と学習者の談話には、それぞれの事態把握の違いが表れていることが明らかになった。母語話者の事態把握は、語り手である自分を主人公のピングーに一体化させ、物事を表現する「主観的事態把握(ある出来事をその当事者として、内部から主観的に捉える(大江(1975))」であるが、学習者の事態把握は、自分自身を切り離し、主人公のピングーが遭遇する事態を外から客観的に捉える「客観的事態把握」である。

このように母語話者と学習者の間の事態に対する把握の違いが、語りの談話の中でも表現の差となって表れている。「母語話者は客観的事態把握をできない」または「学習者は主観的事態把握をできない」というのではなく、両者ともにどちらの事態把握もできるが、類型論的に言語によって好まれる事態把握の仕方があるということである。日本語の場合は、「主観的事態把握」：ある事態を言語化するに際して、話し手がわが身をその事態の中におくという意味で、＜臨場的＞に、そして、同時に自らを観察の原点として自らにとって問題の自体がいかに見えるかという形で＜体験的＞に、把握をおこなう(池上(2004:40-41))のがプロトタイプ(より典型的な、無標のもの)であり、より日本語らしい談話

展開には「主観的事態把握」が不可欠なのである。

7. 結語

本稿は、日本語母語話者と学習者のアニメーションの内容を記述した語りの談話を用い、主人公と重要なやりとりを行う新登場(人)物の新規導入場面における談話展開の考察を、視点(注視点と視座)に注目して行った。

その結果、母語話者は新登場(人)物を談話に導入するとき、その(人)物に一時的に注目が集まるように、「新登場(人)物をガでマークし、注視点をそこに移動する」ことが明らかになった。ガによって一時的に予想外の出来事に焦点をあて、現場描写を行っている。しかし、「視座は談話全体を通して、一貫して主人公に置く」という特徴があり、談話展開がスムーズで、読み手に分かりやすい文章になっている。

一方、中・上級学習者は、注視点の新登場(人)物への移動をほとんど行わず、行ったとしても視座を主人公(ピングー)に固定していない。特に中級では、視座を判定する手がかりを使用しない傾向が見られた。母語話者の特徴である「注視点の登場(人)物への移動」と「視座の主人公への固定」は、上級学習者においても全くできておらず、習得が難しいものといえる。この注視点と視座に関する母語話者との差が、学習者の作文の不自然さの原因の一つだと考えられる。

また、母語話者は主人公のピングーと自分自身を一体化させ、ピングーの立場から物事を捉え表現する「主観的事態把握」を行っており、この把握の仕方は、日本語の語りの談話におけるプロトタイプである。しかし、学習者は事態を外側から見る「客観的事態把握」を行っており、両者の事態把握の違いが顕著な違いとして談話に表れた。

この研究で得られた注視点と視座、さらに事態把握に関する知見は、スムーズかつ自然な談話展開の指導に役立てることができると考える。

最後に、中国語や英語のような「客観的事態把握」を母語とする学習者の談話を、より日本語らしい自然なものに近づけるためには、学習者に「主観的事態把握」を意識させる必要がある。具体的には、ある事柄に対して、「主観的事態把握」と「客観的事態把握」の違いがわかる絵教材・ビデオ等を用意し、両者の違いを示しながら、日本語でより自然な把握・表現の仕方を学習者に提示していくのも一つの方法である。このような認知言語学的観点を取り入れた日本語教育研究はまだまだ少ないが、研究の成果を教材開発や日本語教授法へと応用できるのではないだろうか。

【付記】

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(B)研究、研究論集(平成 15～18 年度、「文法と談話の接点」)における研究成果報告と日本語教育学会(2006 年 10 月 7、8 日於熊本大学)で行った研究発表に加筆・修正を加えたものである。本稿執筆にあたり、砂川有里子先生、澤田浩子先生より貴重な

ご意見、ご助言を賜った。ここに記して謝意を表したい。なお、本論の不備はすべて筆者の責任による。

【参考文献】

池上嘉彦（1983）「テクストとテクストの構造」『談話の研究と教育Ⅰ』日本語教育指導参考書 11　国立国語研究所

_____（2000）『日本語論への招待』講談社

_____（2004）「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語指標」（2）『認知言語学論考』4号　ひつじ書房

大江三郎（1975）『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂

奥川育子（2006）「日本語母語話者と学習者の談話展開―視点(注視点と視座)に注目して―」『平成15年～18年度　科学研究費補助金基盤研究(B)研究　研究論集　談話と文法の接点』pp101-110

_____（2006）「中国人学習者と母語話者の談話展開―視点(注視点と視座)注目して―」日本語教育学会秋季大会予稿集 pp177-182

金　慶珠（2001）「談話構成における母語話者と学習者の視点―日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に―」『日本語教育』109

久野　暲（1978）『談話の文法』大修館書店

佐伯　胖（1978）『イメージ化による知識と学習』東洋館出版社

田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点」『日本語教育』85

宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』認知科学選書 1　東京大学出版

松木正恵（1992）「「見ること」と文法」『日本語学』11-8 明治書院

渡邊亞子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』日本語教育基礎研究シリーズ 3　くろしお出版

渡辺文生（2003）「日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究」平成 13~14 年度科学研究費補助金　基礎研究(C2)研究成果報告書

DuBois, John W. (1987) "The Discourse Basis of Ergativity." Language 63.4, pp805-855.

Langacker, Ronald. W. (1985) "Observations and speculations on subjectivity," In Haiman (eds.), *Iconisity in syntax*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 109-150

_____ (1990a) *Concept, image, and symbol. The Cognitive Bases of Grammar.* Berlin:Mouton de Gruiter.

_____ (1990b) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1 (1), 5-38

_____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar.* Vol. 2, Descriptive application. Stanford: Stanford University Press.

_____ (2001) "Discouse in Cognitive Grammar," *Cognitive Linguisitics* 12 (2), 143-188